

山男の四月

宮沢賢治

青空文庫

山男は、金いろの眼めを皿さらのようにし、せなかをかがめて、にしね山のひのき林のなかを、兎うさぎをねらつてあるいていました。

ところが、兎はとれないで、山鳥がとれたのです。

それは山鳥が、びつくりして飛びあがるとこへ、山男が両手をちぢめて、鉄砲てつぽうだまのようにからだを投げつけたものですから、山鳥ははんぶん潰つぶれてしまいました。

山男は顔をまっ赤にし、大きな口をにやにやまげてよろこんで、そのぐったり首を垂れた山鳥を、ぶらぶら振りまわしながら森から出てきました。

そして日あたりのいい南向きのかれ芝しばの上に、いきなり獲物えものを

投げだして、ばさばさの赤い髪毛かみけを指でかきまわしながら、肩かたを
円くしてごろりと寝ねころびました。

どこかで小鳥もチツチツと啼なき、かれ草のところどころにやさ
しく咲いたむらさきいろのかたくりの花もゆれました。

山男は仰向けあおもむになつて、碧あおいああおい空をながめました。お日
さまは赤と黄金きんでぶちぶちのやまなしのよう、かれくさのいいに
おいがそこらを流れ、すぐうしろの山脈では、雪がこんこんと白
い後光をだしているのです。

(飴あめというものはうまいものだ。天道てんとは飴をうんとこさえている
が、なかなかおれにはくれない。)

山男がこんなことをぼんやり考えていますと、その澄すみ切った

碧いそらをふわふわうるんだ雲が、あてもなく東の方へ飛んで行きました。そこで山男は、のどの遠くの方を、ごろごろならしながら、また考えました。

（ぜんたい雲というものは、風のぐあいでは、行ったり来たりぽか
つと無くなつてみたり、俄かにまたでてきたりするもんだ。そこ
で雲助とこういうのだ。）

そのとき山男は、なんだかむやみに足とあたまが軽くなつて、
逆さまに空気のなかにうかぶような、へんな気もちになりました。
もう山男こそ雲助のように、風にながされるのか、ひとりでに飛
ぶのか、どこというあてもなく、ふらふらあるいていたのです。

（ところがここは七つ森だ。ちゃんと七つつ、森がある。松のい
ま

っぱい生えてるのもある、坊主ぼうずで黄いろなのもある。そしてここ
まで来てみると、おれはまもなく町へ行く。町へはいつて行くと
すれば、化けないとなぐり殺される。」

山男はひとりでこんなことを言いながら、どうやら一人ひとりまえの
木樵きこりのかたちに化けました。そしたらもうすぐ、そこが町の入口
だったのです。山男は、まだどうも頭があんまり軽くて、からだ
のつりあいがよくないとおもいながら、のそのそ町にはいりまし
た。

入口にはいつもの魚屋があつて、塩しお鮭ぎけのきたない俵たわらだの、く
しやくしやになつた鰯いわしのつらだのが台にのり、軒のきには赤ぐろいゆ
で章魚だこが、五つつるしてありました。その章魚を、もうつくづく

と山男はながめたのです。

（あのいぼのある赤い脚あしのまがりぐあいには、ほんとうにりっぱだ。郡役所の技手ぎての、乗馬ずぼんをはいた足よりまだりっぱだ。こういうものが、海の底の青いくらいところを、大きく眼をあいてはつているのはじっさいえらい。）

山男はおもわず指をくわえて立ちました。するとちようどそこを、大きな荷物をしよった、汚きたない浅黄服あさぎふくの支那人しなが、きよろきよろあたりを見まわしながら、通りかかって、いきなり山男の肩をたたいて言いました。

「あなた、支那反物たんものよろしいか。六神丸ろくしんがんたいさんやすい。」
山男はびっくりしてふりむいて、

「よろしい。」とどなりましたが、あんまりじぶんの声がたかかったために、円い鉤かぎをもち、髪をわけ下駄げたをはいた魚屋の主人や、けらを着た村の人たちが、みんなこつちを見ているのに気がついて、すっかりあわてて急いで手をふりながら、小声で言い直しました。

「いや、そうだない。買う、買う。」

すると支那人は

「買わない、それ構わない、ちよつと見るだけよろしい。」

と言いながら、背中の荷物をみちのまんなかにおろしました。山男はどうもその支那人のぐちやぐちやした赤い眼が、とかげのようでへんに怖こわくてしかたありませんでした。

そのうちに支那人は、手ばやく荷物へかけた黄いろの真田紐さなだひもをといてふろしきをひらき、行李こうりの蓋ふたをとって反物のいちばん上にたくさんなんだ紙箱かみばこの間から、小さな赤い薬瓶くすりびんのようなものをつかみだしました。

（おやおや、あの手の指はずいぶん細いぞ。爪つめもあんまり尖とがっているしいよいよこわい。）山男はそつとこうおもいました。

支那人はそのうちに、まるで小指ぐらいあるガラスのコップを二つ出して、ひとつを山男に渡わたしました。

「あなた、この薬のむよろしい。毒ない。決して毒ない。のむよろしい。わたしさきのむ。心配ない。わたしビールのむ、お茶のむ。毒のまない。これながいきの薬ある。のむよろしい。」支那

人はもうひとりでかぶつと呑^のんでしまいました。

山男はほんとうに呑んでいいだろうかとあたりを見ますと、じぶんはいつか町の中でなく、空のように碧いひろい野原のまんなかに、眼のふちの赤い支那人とたった二人、荷物を間に置いて向かいあつて立っているのです。二人のかげがまっ黒に草に落ちました。

「さあ、のむよろしい。ながいきのくすりある。のむよろしい。」支那人は尖った指をつき出して、しきりにすすめるのです。山男はあんまり困つてしまつて、もう呑んで遁^にげてしまおうとおもつて、いきなりふいつとその薬をのみました。するとふしぎなことに、山男はだんだんからだのでこぼこがなくなつて、ちぢま

つて平らになつてちいさくなつて、よくしらべてみると、どうもいつかちいさな箱のようなものに変つて草の上に落ちてゐるらしいのでした。

（やられた、畜^{ちくしやう}生、とうとうやられた、さつきからあんまり爪が尖つてあやしいとおもつていた。畜生、すっかりうまくだまされた。）山男は口^く惜^やしがつてばたしようとしましたが、もうただ一箱の小さな六神丸ですからどうにもしかたありませんでした。

ところが支那人のほうは大よろこびです。ひよいひよいと両脚をかわるがわるあげてとびあがり、ぽんぽんと手で足のうらをたたきました。その音はつづみのように、野原の遠くのほうまでひ

びきました。

それから支那人の大きな手が、いきなり山男の眼の前にでてきたとおもうと、山男はふらふらと高いところののぼり、まもなく荷物のあの紙箱の間におろされました。

おやおやおもっているうちに上からばたと行李の蓋が落ちてきました。それでも日光は行李の目からうつくすきとおつて見えました。

(とうとう^{ろう}におれははいった。それでもやつぱり、お日さまは外で照っている。) 山男はひとりでこんなことを^{つぶ}やいて無理にかなしいのをごまかそうとしました。するとこんどは、急にもつとくらくくなりました。

（ははあ、風呂敷ふろしきをかけたな。いよいよ情けないことになった。これから暗い旅になる。）山男はなるべく落ち着いてこう言いました。

すると愕おどろいたことは山男のすぐ横でものを言うやつがあるのです。

「おまえさんはどこから来なすつたね。」

山男ははじめぐつとしましたが、すぐ、

（ははあ、六神丸というものは、みんなおれのようなぐあい人間が薬で改良されたもんだな。よしよし、）と考えて、

「おれは魚屋の前から来た。」と腹に力を入れて答えました。すると外から支那人が噛かみつくようにどなりました。

「声あまり高い。しずかにするよろしい。」

山男はさつきから、支那人がむやみにしゃくにさわってしましたので、このときはもう一ぺんにかつとしてしまいました。

「何だと。何をぬかしやがるんだ。どろぼうめ。きさまが町へはいったら、おれはすぐ、この支那人はあやしいやつだとどなつてやる。さあどうだ。」

支那人は、外でしんとしてしまいました。じつにしばらくの間、しいんとしていました。山男はこれは支那人が、両手を胸で重ねて泣いているのかなともおもいました。そうしてみると、いままで峠^{とうげ}や林のなかで、荷物をおろしてなにかひどく考え込^こんでいたような支那人は、みんなこんなことを誰^{たれ}かに云^いわれたのだなと考

えました。山男はもうすっかりかあいそうになって、いまのはうそだよと云おうとしていましたら、外の支那人があわれなしわがれた声で言いました。

「それ、あまり同情ない。わたし商売たたない。わたしおまんまとべない。わたし往生する、それ、あまり同情ない。」山男はもう支那人が、あんまり気の毒になってしまつて、おれのからだなどは、支那人が六十銭もうけて宿屋に行つて、い鰯わしの頭や菜じつ葉汁をたべるかわりにくれてやろうと思ひながら答えました。

「支那人さん、もういいよ。そんなに泣かなくてもいいよ。おれは町にはいったら、あまり声を出さないようにしよう。安心しな[。]」すると外の支那人は、やつと胸をなでおろしたらしく、ほお

という息の声も、ぽんぽんと足を叩いてたたいる音も聞こえました。それから支那人は、荷物をしよつたらしく、薬の紙箱は、互たがいにがたがたぶつつかりました。

「おい、誰だい。さつきおれにものを云いかけたのは。」

山男が斯こう云いましたら、すぐとなりから返事がきました。

「わしだよ。そこでさっきの話のつづきだがね、おまえは魚屋の前からきたとすると、いま鱸すずきが一匹びきいくらするか、またほしたふかのひれが、十両テールに何片ぎんくるか知ってるだろうな。」

「さあ、そんなものは、あの魚屋には居なかつたようだぜ。もつとも章魚たこはあつたがなあ。あの章魚の脚つきはよかつたなあ。」

「へい。そんないい章魚かい。わしも章魚は大すきでな。」

「うん、誰だつて章魚のきらいな人はない。あれを嫌きらいなくらいなら、どうせろくなやつじゃないぜ。」

「まったくそうだ。章魚ぐらいいりっぱなものは、まあ世界中にないな。」

「そうさ。お前はいつたいどこからきた。」

「おれかい。上しやんはい海だよ。」

「おまえはするとやっぱり支那人だろう。支那人というものは薬にされたり、薬にしてそれを売つてあるいたり気の毒なもんだな。」

「そうでない。ここらにあるいてるものは、みんな陳ちんのようないやしいやつばかりだが、ほんとうの支那人なら、いくらでもえら

いりっぱな人がある。われわれはみな孔子^{こうしせいじん}聖人の末なのだ。」

「なんだかわからないが、おもてにいるやつは陳というのか。」

「そうだ。ああ暑い、蓋^{ふた}をとるといいなあ。」

「うん。よし。おい、陳さん。どうもむし暑くていかんね。すこし風を入れてもらいたいな。」

「もすこし待つよろしい。」陳が外で言いました。

「早く風を入れないと、おれたちはみんな蒸^むれてしまう。お前の損になるよ。」

すると陳が外でおろおろ^{ごえ}声を出しました。

「それ、もとも困る、がまんしてくれるよろしい。」

「がまんも何もないよ、おれたちがすきでむれるんじゃないんだ。」

ひとりでにむれてしまうさ。早く蓋をあけろ。」

「も二十分まつよろしい。」

「えい、仕方ない。そんならもう少し急いであるきな。仕方ないな。ここに居るのはおまえだけかい。」

「いいや、まだたくさんいる。みんな泣いてばかりいる。」

「そいつはかあいそうだ。陳はわるいやつだ。なんとかおれたちは、もいちどもとの形にならないだろうか。」

「それはできる。おまえはまだ、骨まで六神丸になっっていないから、丸薬さえめばもとへ戻る。^{もと}おまえのすぐ横に、その黒い丸薬の瓶^{びん}がある。」

「そうか。そいつはいい、それではすぐ呑^のもう。しかし、おまえ

さんたちはのんでもだめか。」

「だめだ。けれどもおまえが呑んでもとの通りになつてから、おれたちをみんな水に漬けて、よくもんでもらいたい。それから丸薬をのめばきつとみんなもとへ戻る。」

「そうか。よし、引き受けた。おれはきつとおまえたちをみんなもとのようにしてやるからな。丸薬というのはこれだな。そしてこつちの瓶は人間が六神丸になるほうか。陳もさつきおれといつしよにこの水薬をのんだがね、どうして六神丸にならなかつたろう。」

「それはいつしよに丸薬を呑んだからだ。」

「ああ、そうか。もし陳がこの丸薬だけ呑んだらどうなるだろう。」

変らない人間がまたもとの人間に変わるとどうも変だな。」

そのときおもてで陳が、

「支那たものよろしいか。あなた、支那たもの買うよろしい。」
と云う声がしました。

「ははあ、はじめたね。」山男はそつとこう云つておもしろがつ
ていましたら、俄かに蓋があいたので、もうまぶしくてたまりま
せんでした。それでもむりやりそつちを見ますと、ひとりのおか
っぱの子供が、ぽかんと陳の前に立っていました。

陳はもう丸薬を一つぶつまんで、口のそばへ持つて行きながら、
水薬とコップを出して、

「さあ、呑むよろしい。これながいきの薬ある。さあ呑むよろし

い。」とやっています。

「はじめた、はじめた。いよいよはじめた。」行李こうりのなかでたれかが言いました。

「わたしビール呑む、お茶のむ、毒のまない。さあ、呑むよろしい。わたしのむ。」

そのとき山男は、丸薬を一つぶそつとのみました。すると、めりめりめりめりつ。

山男はすっかりもとのような、赤あかがみ髪の立派なからだになりました。陳はちょうど丸薬を水薬といっしよにのむところでしたが、あまりびっくりして、水薬はこぼして丸薬だけのみました。さあ、たいへん、みるみる陳のあたまがめらあつと延びて、いままでの

倍になり、せいがめきめき高くなりました。そして「わあ。」と云いながら山男につかみかかりました。山男はまんまるになつて一生けん命遁げました。ところがいくら走ろうとしても、足から走りということをしているらしいのです。とうとうせなかをつかまれてしまいました。

「助けてくれ、わあ、」と山男が叫びました。そして眼をひらきました。みんな夢だったのです。

雲はひかつてそらをかけ、かれ草はかんばしくあたたかです。

山男はしばらくぼんやりして、投げ出してある山鳥のきらきらする羽をみたり、六神丸の紙箱かみばこを水につけてもむことなどを考えていましたがいきなり大きなあくびをひとつして言いました。

「ええ、畜生、夢のなかのこった。陳も六神丸もどうにでもなれ
。」

それからあくびをもひとつしました。

青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

初出：「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部
・東京光原社

1924（大正13）年12月1日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年2月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山男の四月

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>